

フランス語圏におけるマルサス人口論の普及過程

喜多見 洋（大阪産業大学）

1.はじめに

本報告ではこのセッションのテーマである「マルサス主義の国際的普及」の一側面としてフランス語圏におけるマルサス人口論の普及過程を取りあげる。時期的には、『人口の原理』が出版された18世紀末から19世紀中葉までを中心に検討するが、一般に、18世紀のフランスはポピュレーションイズムが支配的であったとされている。すなわちケネー、ミラボー、ネッケルといった18世紀の論者たちも、人口が生存資料に依存するので、雇用や所得に裏づけられない人口増大は、貧者の堆積に終わってしまうことを指摘し、むしろ雇用や所得の増大に心がけるべきだと説いたが、いずれの論者もやはり基本的には人口増大を望んでいたとされている。ところが、こうしたフランスの思潮は、19世紀に入ると変化する。マルサスの『人口の原理』初版が出版されたのが1798年であり、それが、フランスにおけるこの変化に少なからぬ影響を与えたのは間違いないが、ここではこの変化を、「フランスにおけるマルサス人口論の普及をめぐる動き」という視点から考えてみたい。そして、その場合、フランスだけでなく、今日ではフランスに属していないジュネーヴを中心としたフランス語圏スイスにも注目し、検討をくわえることにする。というのは、そもそもフランスにおけるマルサス人口論の普及に際しては、ジュネーヴのアカデミーの教授ピエール・プレヴォ **Pierre Prévost** (1751-1839)と彼の周辺にいた知識人達が、重大な役割を果たしているからである。彼がマルサス『人口の原理』の仏訳者として知られていることは、ここであらためて指摘するまでもないであろうが、彼をはじめフランス語圏スイスを共通の基盤とする知識人達の活動に目を向けないと、フランスにおけるマルサス人口論の普及過程を十分な形で把握できないということは間違いない。

そこで、以下においては、最初に、雑誌『ビブリオテック・ブリタニク』*Bibliothèque britannique*を取りあげ、次にプレヴォによる『人口の原理』仏訳、さらにその後の動きという順序で論じることとする。なお、プレヴォという人物については、すでに第72回大会(愛媛大)の『大会報告集』で論じているので、詳しくはそちらを参照していただきたい。ここでは、プレヴォが、①D. Stewartと親しく、長年にわたり手紙をやり取りしていたこと、②スミスの『哲学論文集』をはじめ、いくつもの英語文献を翻訳し、英国の哲学、思想、社会科学の大陸への伝播に貢献したこと、③マーセット家との姻戚関係に端的に示される

ようにイギリスとの深いつながりがあったということ、④シスモンディと親しく、晩年まで知的交流が続いていたということ、の4点を確認しておく。

2. マルサス人口論と *Bibliothèque britannique*

そこで、まず取りあげるのは、『ビブリオテック・ブリタニク』である。プレヴォが『人口の原理』の仏訳を出版するのは、1809年のことであるが、それ以前にも、フランス語圏ではすでにマルサス人口論の普及に関連した動きが存在していた。そうした動きのうちでもとりわけ興味深いのが、この『ビブリオテック・ブリタニク』におけるマルサス人口論の紹介である。18世紀末から19世紀はじめにかけてジュネーヴで刊行されていたこの雑誌¹は、イギリスの雑誌や著作からの抜粋、書評を中心に作られており、文学、哲学から、社会科学、自然科学さらには農学にいたるまで、たいへん幅広い領域にわたって当時のイギリスの新しい思想・文化・科学技術をフランス語世界に紹介していたのである。それにより、この雑誌は、フランスおよびフランス語圏において一定の影響を持っていた。そして『人口の原理』出版後、イギリスの論壇で注目されたマルサス人口論もこの雑誌でかなり詳しく紹介されている。『ビブリオテック・ブリタニク』は、*Littérature* と *Sciences et arts* および *Agriculture anglaise* という3つのシリーズに分かれていたが、『人口の原理』が抜粋の形で分載されたのは、この雑誌のシリーズ *Littérature* の第28巻(1805)から第30巻(1805)にかけてであり、その際用いられたのは1803年に出た原著第2版である。しかも、さらに1806年の第31巻には、プレヴォが書いた「人口の原理についてのマルサスの著作によって示唆されたいくつかの考察」も掲載されている。

ここでのプレヴォの活動は、マルサス人口論の紹介であるが、プレヴォ自身『人口の原理』の翻訳について、第30巻に掲載された最後の抜粋の終わりの部分で次のように述べている。「残念なことだが、私はそれ [= 『人口の原理』] を全部翻訳するのをあきらめた。そして私は、その重要性を高く評価し、あらゆる時と場所において真理であるが、著者が賢明にも、彼の国に適するように気を配っている諸原理をフランスの土壤に適合させることができる人によって、この務めが果たされることを強く望む。」²しかし、結果的にプレヴォは、ここで彼自身が書いているように翻訳を他の人間に委ねることはなかった。実際に『人口の原理』を翻訳したのはやはりプレヴォであった。このあたりの事情につい

¹ この雑誌を創刊したのは、3人のジュネーヴ人 Marc-Auguste Pictet(1752-1825)、Charles Pictet de Rochemont(1755-1824)、Frédéric-Guillaume Maurice(1750-1826)であり、プレヴォもこの雑誌に編集協力者として協力していた。

² *Bibliothèque britannique, littérature*, Vol. 30, N° 4, 1805, p.430.

て、1809年版仏訳につけられたプレヴォの「訳者のはしがき」によれば、マルサスがこの『ビブリオテック・ブリタニク』の紹介を見て、プレヴォに『人口の原理』のフランスへの翻訳を勧めたのだという。マルサスがこの雑誌を見たのには、プレヴォの息子やマーセット家などイギリスにおけるジュネーヴ人ネットワークが関与しているであろうが、これから見ても、マルサスの見解のフランス語圏における普及という点でこの雑誌の果たした役割が決して小さなものではなかったことがわかるであろう。

マルサス『人口の原理』

(原著)	(仏訳)
初版(1798)	
第2版(1803)	……………→『ビブリオテック・ブリタニク』で 抜粋の形で紹介(1805)
第3版(1806)	
第4版(1807)	……………→ 仏訳初版(1809)
第5版(1817)	……………→ 仏訳第2版(1823)
第6版(1826)	

3. プレヴォによる『人口の原理』仏訳

プレヴォによる『人口の原理』のフランス語訳は、こうした事情を背景として刊行される。彼の仏訳は、まず1809年に出る³。この版は、1807年に出た原著第4版の翻訳である。ただしこれは、厳密には『人口の原理』の全訳とはいえない。プレヴォ自身が「訳者のはしがき」⁴で書いているようにマルサスが、プレヴォに必要な変更を加える許可を与えたわけであるから、プレヴォが勝手に変更を加えたわけではないが、彼がイギリス的と判断した章を削除したり、救貧法にあてられた章を短縮したりしている。また、コンドルセやヤングについての件も削除されている。さらに、**principle of population** の訳に象徴されるようにマルサスによって用いられた用語のフランス語訳についても自分の見解

³ T. R. Malthus, *Essai sur le Principe de Population, ou Exposé des effets passés et présents de l'action de cette cause sur le bonheur du genre humain*; suivi de quelques recherches relatives à l'espérance de guérir ou d'adoucir les maux qu'elle entraîne; traduit de l'Anglois par Pierre Prévost, A Paris, chez J.J. Paschoud, Libraire. A Genève, chez le même Libraire. 1809.

⁴ T. R. Malthus, *Ibid.*, p.vii.

を明示しているが、プレヴォにとっては、これも「あらゆる時と場所において真理であるが、著者が …………… 彼の国に適するように気を配っている諸原理をフランスの土壌に適合させる」ことになるのだろう。

結局、『人口の原理』の最初の全訳が現われるのは、1823年のことである⁵。それは、1817年に出た原著第5版の仏訳であり、訳者として1809年版仏訳の訳者ピエール・プレヴォに加え、彼の息子であるジュネーヴの法学博士ギョーム⁶も訳者に加わっている。題名は、1809年版と同じであり、4巻本の形が出る。この版の主要な再版としては、①1836年、パリの Treuttel et Wurtz 出版社によるもの、②1845年、ロッシ、シャルル・コント、ジョゼフ・ガルニエの協力によってパリの Guillaumin 社から出されたもの（『主要経済学者著作集』の第7巻）⁷、③1852年に、ほとんど変更を加えず、やはり Guillaumin 社から出されたもの⁸などがあげられる。その他、1823年版をもとに1841年にベルギーで出版されたものなどもあるが、いずれにしてもこの1823年版が、以後かなりの期間『人口の原理』フランス語訳のスタンダードになるのは確かである⁹。

4. 人口論の普及

以上のような『人口の原理』の紹介やフランス語訳諸版の出版をめぐる動きから、19世紀前半のフランスで、人口は多ければ多いほど望ましいとして楽観的に人口増加を賛美するポピュレーションニズムの考え方が勢いを失い、マルサス人口論が受容され、普及していったことが、容易に推測できるであろう。この普及が比較的順調に進んだ背景には、一般に指摘されるように19世紀前半の

⁵ T. R. Malthus, *Essai sur le principe de Population, ou exposé des effets passés et présents de l'action de cette cause sur le bonheur du genre humain ; suivi de quelques recherches relatives à l'espérance de guérir ou d'adoucir les maux qu'elle entraîne.* Traduit de l'anglais sur la 5^e édition par Pierre Prévost et par son fils G. Prévost. Deuxième édition française. Genève, J.J. Paschoud, 1823, 4 vol.

⁶ Guillaume Prévost (1799-1883). ピエール・プレヴォの3男。

⁷ T. R. Malthus, *Essai sur le principe de population.* Traduit de l'anglais par MM. Pierre et Guillaume Prévost (de Genève). Précédé d'une introduction par P. Rossi, et d'une notice sur la vie et les ouvrages de l'auteur, par Charles Comte, avec les notes des traducteurs, et de nouvelles notes par M. Joseph Garnier, Première édition, Paris, Guillaumin, 1845. ドイツの Zeller d'Ossnabrück 社から1966年に出版されたのは、この版のリプリントである。

⁸ T. R. Malthus, *Essai sur le principe de population.* Traduit de l'anglais par MM. Pierre et Guillaume Prévost (de Genève). Précédé d'une introduction par P. Rossi, et d'une notice sur la vie et les ouvrages de l'auteur, par Charles Comte, avec les notes des traducteurs, et de nouvelles notes par M. Joseph Garnier, 2^e édition, Paris, Guillaumin, 1852.

⁹ ちなみに1992年に Flammarion 社からペーパーブックで出された『人口の原理』もこの訳を用いている。

フランスに見られる人口統計上の事情、すなわちフランスにおける人口の増加基調があったことは確かである。そして、ナポレオンの時代およびそれ以降、次第に実権がブルジョアジーの手に移ったフランスでは、ポピュレーションイズムよりもむしろ個人主義、自由主義的思考が浸透していったことも影響しているであろう。また、この時期、イギリス風の自由主義経済学が伝播し、J.-B.セー、P.ロッシ、ジョセフ・ガルニエといった経済学者たちの間でマルサス人口論が受け入れられていたことも指摘しておくべきであろう。さらに、これらに加え、ジュネーヴという特殊な場がマルサス人口論の普及に寄与したということも看過してはならない。「プロテスタントのローマ」と呼ばれることが多いこの都市は、新教国イギリスと人的、経済的に親密なつながりをもっており、プレヴォがマルサス人口論の紹介、翻訳を通じ、その普及に貢献できたのもそうしたつながりに立脚してのことである。ちなみに **Guillaumin** 社の『人口の原理』に「序文」をつけているロッシにしても、「マルサスの生涯と業績」を載せているシャルル・コントにしてもいずれもジュネーヴへの亡命経験を有している¹⁰。その意味でも、この町はマルサス人口論の普及に深くかかわっているといえるであろう。

¹⁰ ペルグリノ・ロッシは、ジュネーヴのアカデミーで法学の教授であった。